

花ちゃん・オー君・モンタ博士のわくわくドキドキ国立てくてく

国立第七小学校 平成25年11月29日 NO.63

花ちゃん 「モンタ博士、校庭の木も色づいてきて、とてもステキですね。」

オー君 「そうだな。葉っぱの色も赤や黄色だけじゃなくて、いろいろな色があるね。」

花ちゃん 「とくに、青空にすけて見える木々（きぎ）の葉は、色とりどりで、とてもすばらしいわ。」

オー君 「そうだね。まるで、色とりどりのステンドグラスみたいだな。」

花ちゃん 「ステンドグラスか……。オー君。なかなかいいこと言うね。」

オー君 「ところでさ、おいらは、また不思議（ふしぎ）に思うんだけど、どうして色づいたまんまでいてくれないのかなって思うんだよな。」

モンタ博士 「その通りだね。でも、その前に校庭の葉っぱが色づいてきたことに気がついたことはすばらしいことだ。秋もだんだんと深（ふか）まっているんだねと、感（かん）じることが大切（たいせつ）だね。ところでさ、どうして、葉っぱが色づいて、葉っぱが落（お）ちるかは、おとといお話ししたよね。」

花ちゃん 「ちょっと難しいアントシアンとか、カロチノイドとかのことですね。」

オー君 「うん。おいらは、忘れました。ともかく、葉っぱの中に、赤くなったり、黄色くなったりする『もと』があるということだったよね。」

モンタ博士 「そうだね。そのくらいわかっていればたいしたものだね。それじゃ、葉っぱが木から落ちるのはどうしてだったかな。これも覚えているかな。」

花ちゃん 「植物はふつう根から水分や養分（ようぶん）をすいあげて、葉っぱから水分を蒸発（じょうはつ）させるんでしょ。」

モンタ博士 「その通りだね。それから……。」

花ちゃん 「冬は寒くなって、地面から水をあげる働（はたら）きがよわくなるのよね。」

モンタ博士 「その通りだね。それから……。」

花ちゃん 「そして、冬になっても、春や夏のように葉っぱから水分を出していると、木から水分がなくなって木がかれてしまうでしょ。」

モンタ博士「その通りだね。それから・・・。」

花ちゃん 「だから、木は自分がかれないように、寒くなると葉を落とすのよ。ようするに、自分を守るために葉っぱを落としているということよ。」

モンタ博士「すごいね。その通りだよ。さすがは花ちゃんだ。」

オー君 「ほんとだ。すごいな。あれ？花ちゃん、さっきから何を見ているの。」

花ちゃん 「え！何でもいいでしょ。秘密（ひみつ）よ。」

オー君 「秘密というと、見たくなるんだよな。何を持（も）ってるの。見せてよ。」

えい！お！これは、おとといの『国立てくてく』だ。」

花ちゃん 「ねえ、オー君。勝手（かって）に見ないでよ。いじわる。」

モンタ博士「まあまあ、けんかしちゃダメだよ。それにしても、『バックナンバー』を見てくれたのはうれしいね。」

オー君 「モンタ博士、色づいたり、葉っぱを落とすわけはわかったけど、なぜ、葉っぱは落ちるのかな。おいら、またまたわかんなくなっちゃった。」

モンタ博士「いい質問（しつもん）だね。きのうはお話ししなかったけどね、葉っぱのつけねに、葉っぱが落ちる『しかけ』ができるんだよ。」

花ちゃん 「え！葉っぱの落ちる『しかけ』？」

モンタ博士「『しかけ』というのはね、『しくみ』といってもいいね。つまり、離層（りそ

う）といってね、

離（はな）れるため

の『しかけ』さ。

これができるとう水分

や養分が流（なが）

れにくくなって、

自然に葉っぱが落ち

るというわけさ。

右の絵をよく見ると

いいよ。」

落葉のしくみと離層

